

第7回伊勢・三河湾の環境と漁業を考える 「豊かな海と魅力ある漁業の再生を目指して」

日比野学・宮脇 大（愛知水試漁生研）・中村元彦（愛知県庁水産課）
・水野知巳・藤原正嗣（三重水研鈴鹿）

2011年11月19日(土)、愛知県の名古屋港湾会館において、浅場の生物生産機能をテーマに「第7回伊勢・三河湾の環境と漁業を考える」が開催された。関東・東海地方を中心に96名（研究者39名、行政28名、漁業者15名など）の参加者のもと、伊勢・三河湾における浅場の漁業資源の成育場や漁場としての役割、さらに浅場環境悪化の最新知見や東京湾での研究事例の紹介など5題の発表と総合討論が行われた。

木村伸吾（東大気海洋研）副会長からの挨拶のあと、コンピーナーを代表して日比野（愛知水試漁生研）が、漁場だけでなく漁業資源が形成される過程（生活史）を意識した場の捉え方を必要とする旨の趣旨説明を行った。

前半は、各漁業生物における浅場の成育場機能に関する紹介として3題の発表が行われた。まず、津本（三重水研）は魚類に焦点をあて、伊勢湾西岸の砂浜海岸の砕波帯において小型曳き網による調査を行い、アマモ場等他の生息域よりも多い90種以上の仔稚魚の出現を認めたこと、そして水産業上重要種であるトラフグ稚魚が出現し、摂餌状況も良好であり、本種伊勢・三河湾系群の生活史を繋ぐ（資源形成）上で重要な場であると指摘した。

次いで、原田（愛知水試漁生研）が甲殻類に焦点をあて、伊勢湾東岸の前浜干潟や矢作川河口域で行った桁網調査をもとに、クルマエビ類の稚エビの出現状況を紹介した。クルマエビ類は稚エビ期に浅場に着底し成育場として利用するが、出現する場は種間で明瞭に異なり、クルマエビ・クマエビは前浜干潟を、ヨシエビ・シバエビは河口干潟を主に利用することを明らかにした。

続いて、宮脇（愛知水試漁生研）が貝類に焦点をあて、アサリを中心に三河湾で行われてきた調査事例を紹介した。アサリの生活史は浅場に依存しており、特に河口干潟は稚貝場として重要であり、漁業者によって実施される稚貝移植は、湾内浅場の高度利用及び再生産ネットワークの強化に繋がることなどを説明した。また、河口干潟の稚貝生産機能を経済的に評価した事例を紹介し、莫大な生態系サービスが存在することを示した。

後半部分では、まず和久（愛知水試）が、三河湾には生物の出現がほとんど見られない「デッドゾーン」が、沿岸の埋め立て面積よりも多く存在することを紹介した。デッドゾーンは、浚渫航路や埋め立て地の後背水路等に存在し、生物生産が行わ

れないだけでなく、無酸素水や硫化水素の供給源となり周辺浅場や湾全体への環境悪化にも繋がっている可能性があり、今後修復すべき場の一つである点を指摘した。

最後に、加納（茨城大広域水圏環境科学教育研究セ）が、東京湾における浅場消失と周辺浅場における希少種を含むハゼ科魚類の動向事例から、東京湾の浅場の機能劣化について紹介した。ハゼ科魚類を環境の変化に鋭敏に対応する指標種として捉え、東京湾では「干潟から人工海岸への置き換わり」、「環境特性が異なる干潟の消失」、「河口汽水域の分断」、「微小生息場所の破壊」と時空間的に異なる浅場の“消失”と“劣化”が生じている点を指摘した。また、人工干潟が造成されても、生態系を構成する元種が周辺にすでに存在していない場合には、在来生態系は復元しない、またはしても時間がかかるなど、浅場復元における再生産ネットワークの重要性を強調した。

総合討論では、各発表への質問を受け付けた後、日比野（愛知水試漁生研）を座長として、種ごとの生活史と場の関わりについて議論を進めた。出席した漁業者からは「中部国際空港がある場はかつてヒロセという広大な浅場であり、当時の漁業は面白かった」、「湾奥干潟の埋め立てに伴い、コノシロが激減した」等の現場の声が出された。そして、今後の伊勢・三河湾の豊かで多様な環境と漁業の再生には、まずは現存する浅場の価値に対する認識を共有すること、次に具体的に干潟・浅場を造成・修復する際には、単に面積的に場を作る（「量的」な造成をする）のに加え、デッドゾーン改善や生物多様性を担保できるような「質的」側面に着目した対応が必要であるとの考え方が提示された。

